

Alternative Systems Study Bulletin

メール版 第26巻第6号 (2019年4月8日)

23回目のメール版を送ります。

ルネサンス研究所などの複数のメーリングリストに投稿しますので、これまで手に取っておられなかった方々にも届くことになります。配信停止の手続きは、メールで連絡して下さい。できればいいのですが、メーリングリストのばあいは配信停止ができません。お手数ですが届いたら削除して下さい。

この小冊子は、1993年から発行しています。最初は知的創造集団のネットワーク形成をめざし、数人の同人で始めました。しかし、私が阪神大震災以降多忙になったこともあり、第4巻(1996年)からは私の個人誌として再出発しています。そのころは協同組合のシンクタンクづくりをめざしていました。シンクタンクづくりは実現していませんが、以降隔月刊で発行し、主要な論文はHPに掲載しています。

メール版で発行したバックナンバーは、PDFファイルにしてHPの「バラキン雑記」のところに掲載しています。ぜひご覧ください。

2015年度の『ASSB』のPDFファイル。

http://www.office-ebara.org/modules/weblog/details.php?blog_id=239

2016年度の方は次です。

http://www.office-ebara.org/modules/weblog/details.php?blog_id=240

2017～8年度の方は次です。

http://www.office-ebara.org/modules/weblog/details.php?blog_id=244

メール版は拡散自由です。またいろいろな意見や異論があれば、メールでお知らせください

編集 境 毅(筆名:榎原 均)

連絡先 〒600-8691 京都市下京区東塩小路町 京都中郵私書箱 169号 貿易研究会

ホームページ <http://www.office-ebara.org/>

メール sakatake2000@yahoo.co.jp

購読料 無料 (カンパ歓迎)

カンパ振込先(郵便振替) 口座番号:01090-5-67283 口座名:資本論研究会

他金融機関からの振り込み 店名:109 当座 0067283

26巻第6号 目次

はじめに

なぜ今ガタリに注目しているのか

マルクス生誕200年にやっと明かされた、価値形態論平易化の代償

商品とお金の弁証法的精神分析(上)

商品とお金の弁証法的精神分析(下)

『アンチ・オイディプス』の精神分析批判

商品という社会的象形文字を読む(最終版)

はじめに

今号も発行日が遅れてしまいました。いろいろ事情があるのですが、ここでは述べません。4月に次号も発行し、遅れを取り戻します。なお、最後に「商品という社会的象形文字を読む（最終版）」をつけました。この間色々変えてきましたが、これが当面の最終版です。

なぜ今ガタリに注目しているのか

1. ソ連崩壊の原理的根拠の解明

私は、60年安保闘争の敗北の原因を、ロシア革命に続くべきであったヨーロッパ革命の敗北の原因の解明として自らに課してきました。そのうえ、70年の武装闘争の敗北も加わり、解明すべき事態は増えていきました。

しかし、逆に問題意識はとぎすまされることになり、ほんのわずかだったとはいえ、軍事組織と非合法党の経験をつんだことで、敗北の総括に幅が出ることになりました。具体的な総括はここでは触れず、ガタリとの関連でいえば、ソ連崩壊の原理的根拠という形で主張している提案があります。

それは、『資本論』初本文価値形態論の研究から、貨幣の生成が、現行版と違って、価値形態論では説かれておらず、交換過程論で貨幣が生成するとなっていることに注目しました。しかもその生成の実情は、商品所持者たちの無意識のうちでの本能的共同行為によって、金が貨幣とされることと読めます。ここから、伝統的な共産主義運動の王道である、国家権力を奪取し、プロレタリアート独裁を樹立して、商品・貨幣関係の廃止を作りだすという戦術の再検討をしました。無意識のうち、本能的に行っている共同行為によって、商品から貨幣が生成されているとすれば、貨幣の廃止は意志行為では無理だという結論が導かれます。

私はこの政治的結論をソ連崩壊の直前に定式化し、テーゼ「緊急の課題」にまとめました。そして、その後ソ連が崩壊してしまったので、この提案を、ソ連崩壊の原理的根拠としてまとめました。しかし、この私の提起は、私たち元赤報派の仲間以外には、誰にも受け入れられることがなかったのです。活動家仲間は、これを認めれば、従来の共産主義運動の戦術を否定することになるので、認めることに踏み切れないということは理解できるのですが、研究者も理解しようとはしません。

この提案は、1988年にまとめていますから、もう30年たちます。この間正攻法でこの提案を主張してきましたが、それではダメだと気づき、他の方法を考えました。

2. 背景にある『資本論』初本文価値形態論の軽視

例えば、熊野が岩波新書『資本論の哲学』を出しましたが、初版の価値形態論には触れていません。学会では『資本論』初版の独自の意義は無視され続けています。これはなぜなのかと考えたときに、初本文価値形態論では、無意識や本能が論じられていて、そのせいで研究者の理解のかなたにあるのではないか、ということに気づきました。つまりマルクスは初本文価値形態論では、商品と貨幣の弁証法的精神分析を試みていて、それが研究者の理解を拒んでいるのではないかということなのです。

3. 商品と貨幣の弁証法的精神分析の先行研究の調査

こうして私は今年になって、商品と貨幣の弁証法的精神分析を志し、先行研究を調べ始めました。これまで全然興味の対象とはならなかったドゥルーズ・ガタリの『アンチ・オイデ

ィプス』を開いてみたのです。この書は続編の『千のプラトー』とともに、「資本主義と分裂症」をいう副題がつけられているように、資本主義を「分裂分析」したものです。ここには、商品と貨幣の弁証法的精神分析はなされてはいないといえ、資本主義の精神分析が試みられていて、先行研究として踏まえておこうと考えました。

4. 『アンチ・オイディプス』は全然理解できなかった

正直言って、『アンチ・オイディプス』と言えば、これまで全然理解できなかったのですが、しかし、ガタリの単著の『分子革命』なんかは理解でき、興味を持って読みました。ドゥルーズ・ガタリは理解不能だが、ガタリの単著は理解可能だったのです。そんなこともあり、もう一度『アンチ・オイディプス』を読み直し、それなりの理解を得たうえで、ガタリの単著研究を始めました。

5. ガタリ研究の方法

この歳でガタリですので、できるだけ省力化してガタリに迫りたい、ということで各方面に助言をいただきました。その結果『現代思想』2013年6月号のガタリ特集を紹介していただきました。この雑誌はすでに持っていて、ちゃんと傍線が引いてあります。読んだのですが記憶にありません。この特集に、杉村昌昭、村澤真保呂、近藤和敬の三者対談「ガタリ化する世界」が掲載されていて、これが適切なガタリ研究の手引きとなっています。私もそうしようと考えている研究方法を紹介しておきましょう。

杉村さんは、まず次の三冊を読めとっています。『分子革命』（法政大学出版局）、『闘争機械』（松籟社）、『三つのエコロジー』（平凡社ライブラリー）がそれです。この三冊は、ガタリの生涯にわたる見解の研究には必要ですが、とりあえず、『アンチ・オイディプス』の研究のためならば、ガタリの最初の単著『精神分析と横断性』（法政大学出版局）が推奨されています。杉村さんによれば、この書はガタリの「思想と運動の根源」であり「大きな基本は全部『精神分析と横断性』のなかにあ」るのです、私は、早速この書を読み始めていますが、読んでいて、谷川鷹を連想しました。ガタリは、ラポルド精神病院に勤務しつつ、サークル運動をやっている、文字通り「工作者」だったのです。時期も谷川鷹のサークル村の時代と変わりません。

私は、関係を解明する方法を求めて1990年代末に「文化知」を提案し、以降リーマンショックで、経済危機の研究に立ち返るまでは、ヘーゲル弁証法の転倒や、ソシュール、ハイデガー、レヴィナス、アドルノ、デリダ、などの哲学者、また、ピアジェやワロンの心理学者、さらにはギブソンなどの著作を自分の問題意識から検討し文章化してきました。しかしそもそもフロイトが気に入らないことがあって、ガタリには近寄れなかったのです。フロイトはすべて類推ですから、こういう理屈は、もともと理系の私には受け入れがたいのです。それはさておき、ガタリの「分裂分析」は、フロイトのような類推ではなくて、資本主義の生産様式の分析だということが分かり、なおかつ、商品と貨幣の弁証法的精神分析を志している現状で、ぴったりはまりそうです。以上は予告です。なお、私の哲学・心理学探求は次で読めます。なお、デリダなど若干のものは「バラキン雑記」の方ですので、こちらの目次を参照してください。

<http://www.office-ebara.org/modules/xfsection05/>

マルクス生誕 200 年にやっと明かされた、価値形態論平易化の代償

第 1 章 何が問題か

三つの価値形態論

価値形態論は、マルクスの『資本論』の冒頭部分（第 1 章、商品）で説かれています。マルクス自身が認めているように、この本の一番難解な部分です。おそらく現在に至るまで、誰一人理解してはいなかったのではないのでしょうか。その原因は、『資本論』現行版の価値形態論が一番優れたものと考えて、初本文価値形態論をまともに研究しなかったからだ、と私は考えています。

周知のように、マルクスは三つの価値形態論を書いています。『資本論』初本文が最初で、これが難解すぎるということで、クーゲルマンの薦めにしたがって、学校教師風に平易化した付録を書き、初版『資本論』の末尾に収めました。そして『資本論』第二版を編集した時に、この二重の叙述を改めるべく、初本文価値形態論の書き直しを試み、付録を土台にして新たに、現行版にも採用されている価値形態論を書き下ろしたのです。つまり、初版に本文と付録という二つの価値形態論がまずあり、さらに第二版の価値形態論が三番目に書かれたのです。

この三つの価値形態論のうち、最後に書かれ、『資本論』現行版にも採用されている第二版の価値形態論が定本とされ、『資本論』研究が盛んであった日本でも、初版はかえりみられませんでした。しかし、初本文価値形態論を研究してみれば、他の二つの価値形態論と決定的に異なる内容があり、第二版では、その内容が隠されてしまったことが分かります。ある意味、マルクスは価値形態論の平易化をはかろうとして、重大な理論的変更をしてしまったのです。私は、マルクス生誕 200 年の昨年末になって、この理論的変更が、意図されたわけではないでしょうが、結果として重大なミスとなっていて、平易化の代償としてはあまりにも損失が大きく、見逃すことができない問題であることに気づきました。

初版価値形態論から失われたもの

価値形態論では、四つの価値形態が分析されています。これは三つの価値形態論に共通していますが、初版の第Ⅳ形態だけが特別なものです。付録と現行版では、第Ⅳ形態は貨幣形態ですが、初本文ではそうではなくて、貨幣形態が作れない形態なのです。

なぜ、初版の第Ⅳ形態だけが、なじみのない形をとっているのでしょうか。それは、マルクスが、商品からの貨幣の生成は、商品所有者の関与なしには不可能だと考えていたからでした。価値形態論では、商品の所有者は考慮されておらず、ただ商品同士の関係が考察されているだけです。第Ⅳ形態は、すべての商品がそれで他の商品を買おうという関係です。それは不可能ですから、商品同士の価値関係だけでは貨幣生成は不可能だ、というメッセージを、初本文価値形態論は発していたのです。

では、どこで貨幣は生成されるのでしょうか。それは、商品所有者たちが登場する交換過程でした。交換過程で商品所有者たちは、第Ⅳ形態では何ともならぬという商品のメッセージを、商品に意志を宿すことで無意識のうちに受け取り、本能的に、金を貨幣とする共同行為に参加するのです。この商品所有者たちの行為は、本人たちにとっては、自分の商品に価格をつけて市場に売り出す、という意識しかありません。この価格付けという行為の裏には、商品から貨幣を生成する共同行為への参加があるのですが、こちらの方は無意識のうちに本能的に行われているので、意識されてはいないのです。

現行版の価値形態論では、そこで貨幣形態が説かれています。だから、価値形態論と交換

過程論にまたがった、初版本文の貨幣生成論は、隠されてしまっています。詳しく見れば、現行版価値形態論の第三形態は、他の三つと共通の一般的価値形態ですが、その最後に「一般的な価値形態から貨幣形態への移行」という項目があり、そこでは、一般的等価物が特定の商品に固定化されるときに貨幣商品となる、という導入があり、それを受けて、第四形態で貨幣形態が説かれているのです。つまり、好意的に見れば、マルクスは、ここでは一般的価値形態から貨幣形態への移行の「論理」を説いているわけで、貨幣生成について論じているわけではない、と言えますが、しかし、一般的な解釈は、これが貨幣生成論として受け取られているのです。その結果、後世の研究者たちにとっては、価値形態論と交換過程論とをまたがる形での初版の貨幣生成論は、完全に見失われてしまうのです。

平易化によって失われた代償

マルクスは、『資本論』を書いたころもそれ以降も、政治権力を奪取してプロレタリアートが独裁し、それによって資本主義を変革するという戦術を掲げていました。資本主義からコμμニズム（共産主義）への移行の過渡期では、ソ連で実現したような国有化ではなく、協同組合と株式会社とが混合した過渡期経済を考えていたとはいえ（いわゆるアソシエーション革命）、国家権力の力で資本主義を変えようという、当時一般的だった考え方は、批判してはいませんでした。そして、ソ連の試みがうまくいっておれば、価値形態論で払った平易化の代償も、問題にはならなかったでしょう。

ソ連での、国有化と計画経済で、新しい社会を作り出そうという試みが失敗し、ソ連における資本主義の復活、そして、中国も計画経済から市場の導入、さらには資本主義の育成という形で開放改革路線が進む中で、商品と貨幣、そして市場とは何かという問題が、いま、改めて、社会変革をめざす人々にとって、解明すべき理論的課題として現れてきているのです。このような時代において、初版本文価値形態論と交換過程論にまたがった貨幣生成論の復権は、非常に重要な理論問題となっています。

初版の貨幣生成論の実践的適用

私は、1980年代初頭に、初版本文価値形態論の研究を始め、その重要な意義に気づきました。研究しているうちに、その独特の貨幣生成論が、商品からの貨幣の生成が、商品所有者たちの無意識のうちでの本能的共同行為によるものであることが理解できました。私は、当時ソ連社会主義においてなぜ商品生産が残存しているのか、というソ連での論争にも注目しており、もし初版本文の貨幣生成論が、このようなメッセージであるとするならば、人びとが無意識のうちで本能的共同行為で行っていることを、国家権力の意志の力で廃絶しようとするのは背理ではないか、ということに気づいたのです。ソ連崩壊直前の1988年のことでした。そのあとソ連は崩壊してしまったので、私は、この考え方をソ連崩壊の原理的根拠としてまとめています。

そして、この独特の貨幣生成論の見地から、社会変革のためには迂回作戦が必要であることを理解しました。貨幣生成をもたらさないような交易関係を、迂回して形成するという作戦であり、そのためには、政治運動ではなくて社会運動が役立つという判断をしたのです。そしてそれ以降、私は、社会運動にかかわってきています。

マルクス生誕 200 年の年での発見

私は、社会主義理論学会に属しています。ここは、いろいろな党派や学派の人たちが、こだわりなく一緒に研究している団体で、大学に籍のない、私のような独学者も迎え入れてくれています。私が学会に入る決意をしたのは、中国と交流できるからでした。学会は中国の各大学にあるマルクス研究院と交流していて、中日社会主義フォーラムを中国で開催して

いたのです。私は、2012年に、南京師範大学他の受け入れで開催された、第3回中日社会主義フォーラムに参加し、「ソ連崩壊の原理的根拠」について報告してきました。

そのあと、昨年12月26・27日と揚州大学他の受け入れで、第6回中日社会主義フォーラムが開催され、それにも参加してきました。そこで私は、負債論について事前報告書を作成し、危険な負債によって資本主義が発育不全に陥っている、ということをもとめました。その結論が、資本主義が意図せずに、民営化等によって混合経済を作り出しているというものでした。

この報告書を翻訳のために11月に提出して以降、いろいろと考えているうちに、中国の社会主義の初級段階とは市場社会主義ですが、これが、どのようにして Kommunismus へ移行できるのかという問題に取りつかれたのです。ひとつはグレーバーの「基盤的 Kommunismus」についての酒井隆史さんのまとめと、それに応答する形での植村邦彦さんの論文（いずれも『情況』冬号、発売中、に収録）を読み込んだことで、Kommunismusを、従来の考えのような、将来の社会ではなくて、いつの社会にもある「分かち合い」の関係として、把握することができたことです。現代社会に関しては、大企業にも、労働過程での無償の助け合いがなければ生産は進みませんし、また、家族でも分かち合いがあります。唯一市場だけが、金銭での決済という代償を要求されます。この市場の論理が一般的倫理となり、「分かち合い」の倫理が面倒くさいと考えられていますが、これは、「基盤的 Kommunismus」という考え方からすれば、転倒したものであることが分かります。

それはさておき、このような観点から市場をどう位置づけるかと考えた時に、市場の実体は商品と貨幣ですから、貨幣生成論が決定的だと分かったのです。貨幣生成論については、私が組合員有志と始めたサークル「お金の絵本プロジェクト」でずいぶん平易化が進み、初版本文価値形態論を、社会的象形文字と捉えて、その解説を進めてきていました。それもあって中国での学会直前に大きな発見をしたのです。それは初版の第IV形態を転倒するというアイデアでした。ではその内容そのものに移りましょう。

第2章 社会的象形文字としての商品の解説

はじめに

今から、『資本論』初版本文価値形態論の解説に入ります。別に『資本論』を読んでいなくても構いません。商品や貨幣（お金）は、私たちが毎日毎時つきあっているものであり、日常でありふれたものです。ただ、商品を社会的象形文字として読むにはいくつかの約束事があります。商品を社会的象形文字として解説するとは、言いかえれば、社会の中にある、市場に存在している商品と貨幣の関係を、文字として読むということです。その際に、貨幣も商品であり、したがって、まずは貨幣が登場しない商品の関係を考えます。これは、例えば、1万円のシャツ5枚は、5万円の上着と同じ価格ですから、5枚のシャツ＝一着の上着、と表現できますね。これが商品の価値形態の基本形です。

価値形態には、四つの種類があります。私は、初版本文価値形態論に即して、四つの価値形態に、新しく三つの形態を付け加えました。初版本文価値形態論では、貨幣形態は登場しないですから、交換過程での、人が介在することでなされる貨幣の生成によって成立する、貨幣形態を第V形態としました。そして、さらに、私のアイデアである、第IV形態を転倒したものを、第VI形態とします。最後に、第VI形態が、その進化過程で商品交換をのりこえた形を、第VII形態としました。再度確認しますが、マルクスが述べているのは第IV形態までで、あとの三つの形態は私が付け加えたものです。では、この七つの価値形態に即して説明していきましょう。その際、『資本論』で書かれている内容とは重複しないかたちで、単に文字を読むという観点から考察します。

A) 第I形態（簡単な価値形態）

商品の等価物であり、したがって、諸商品の一般的な等価物として表示されています。一般的等価物としての商品Aの表示は、商品A以外のすべての商品が、共同して商品Aを主体として扱っていることの結果です。また、ここで相対的価値形態にある諸商品は、商品Aを仲立ちにしてそれぞれがつながり合えます。ここで諸商品は始めて、社会に通用する形態を獲得したのでした。『資本論』現行版の価値形態論では、次の第IV形態は、一般的等価物が、さまざまな商品から金に固定された、貨幣形態となっています。貨幣は、人格の関与のない価値形態論の領域で生成するという誤解が生じます。ところが、初版本文には、他には見られない、次の第IV形態が続きます。

D) 第IV形態（初版本文第IV形態）

$$\begin{aligned}
 X \text{ 量の商品 A} &= Y \text{ 量の商品 B} \\
 &= Z \text{ 量の商品 C} \\
 &= W \text{ 量の商品 D} \\
 &= \dots \dots \dots \\
 Y \text{ 量の商品 B} &= X \text{ 量の商品 A} \\
 &= Z \text{ 量の商品 C} \\
 &= W \text{ 量の商品 D} \\
 &= \dots \dots \dots \\
 Z \text{ 量の商品 C} &= X \text{ 量の商品 A} \\
 &= Y \text{ 量の商品 B} \\
 &= W \text{ 量の商品 D} \\
 &= \dots \dots \dots
 \end{aligned}$$

この第IV形態は、『資本論』初版本文価値形態論にだけ登場しています。この社会的象形文字は、所有者が登場しない、商品の価値形態論の領域だけでは、貨幣は生成されず、商品の交換過程での人格（商品所有者）の登場を待つことで、貨幣が生成されるということを表示しています。つまりすべての商品が、相手を主体として扱おうと、商品世界の統一的秩序は生まれえないという意味を表現しているのです。

E) 第V形態（交換過程での貨幣生成）

$$\left. \begin{aligned}
 X \text{ 量の商品 A} &= \\
 Y \text{ 量の商品 B} &= \\
 Z \text{ 量の商品 C} &= \\
 \dots \dots \dots &=
 \end{aligned} \right\} V \text{ 量の金}$$

第二章 交換過程、でマルクスは商品所有者を登場させます。この人格は、「自分の意志がそれらの物においてある定在をもつところの諸人格」（初版交換過程）です。交換過程に登場する商品所有者は、第IV形態を受けて、考える前に行動して、無意識のうちでの本能的共同行為に参加し、そのことで貨幣を生成します。人格が介在しなければ貨幣は生まれることはないのです。この点が、現行版『資本論』では隠されています。

この、初版の貨幣生成論によれば、たとえばトヨタが車に 100 万円の価格をつければ、その裏にトヨタがまったく自覚せずに、金を貨幣とする無意識のうちでの本能的共同行為に参加していることが分かります。つまり、貨幣は、生産物が商品として交換過程で価格をつけて送り出されるつど、生成されているのです。ここから、貨幣を生成しないような人間の関与の仕方、を構想できるのではないのでしょうか。私が付け加えた次の二つの形態はその

素材です。

F) 第VI形態（だれもが貨幣形態になりうる＝地域通貨）

一枚の上着	=	}	
一〇ポンドの茶	=		
四ポンドのコーヒー	=		
.....=	=		
二〇エレルのリンネル	=	}	二〇エレルのリンネル
一〇ポンドの茶	=		
四ポンドのコーヒー	=		
.....=	=		
二〇エレルのリンネル	=	}	
一枚の上着	=		
四ポンドのコーヒー	=		
.....=	=		
.....=	=	}	一〇ポンドの茶
.....=	=		
.....=	=		
.....=	=		

現実には、第IV形態の矛盾は、交換過程での商品所有者たちの無意識のうちでの本能的共同行為によって、貨幣生成の運動として解決されています。しかし、第IV形態は、貨幣を生成しないもう一つの経済を暗示している、と読みとれないでしょうか。この観点から、第IV形態を転倒させて第VI形態を描いてみましょう。この形態で等価形態にある商品の所有者たちは、どのような社会的関係をもつのでしょうか。

その一つが地域通貨です。地域通貨の場合は、自分の生産物で他の人の商品が買えますが、それは地域通貨のメンバーが、共同体を構成しているからです。ある意味で、地域通貨は共同体内部の人々が、それぞれ貨幣を創造することで成立している、と見ることができるのが分かります。

また、ここでは、主体相互が分かち合える関係の萌芽が、作り出されていると想定できないでしょうか。主体相互の分かち合いが可能な社会システムが、この第VI形態で示唆されていて、それへの移行が展望できるのではないのでしょうか。というのも、この形態は資本主義の下でも実現可能です。そしてこの形態の占める領域が拡大していけば、現在の主流である貨幣形態の占める役割が狭まっていくでしょう。

また、金融インフラがIT技術の発展で、キャッシュレスが実現しつつあり、スマホが金融機関の端末として、利用されるようになってきています。また、アマゾンなどの大企業が発行するクーポンなど、銀行券に代わるツールが多様になってきています。まだまだ研究不足ですが、金融インフラから新しい動きが始まりそうです。

G) 第VII形態（貨幣形態をつくらない＝労働に応じた分配）

Y 量の財 B	=	}	
Z 量の財 C	=		
W 量の財 D	=		
.....=	=		
X 量の労働 A	=	}	X 量の労働 A
Z 量の財 C	=		
W 量の財 D	=		
.....=	=		
X 量の財 A	=	}	
Z 量の財 C	=		
W 量の財 D	=		
.....=	=		
.....=	=	}	Y 量の労働 B
.....=	=		
.....=	=		
.....=	=		

$$\begin{array}{l}
 X \text{ 量の財 A} \\
 Y \text{ 量の財 B} \\
 W \text{ 量の財 D} \\
 \dots \dots \dots =
 \end{array}
 \begin{array}{l}
 = \\
 = \\
 = \\
 =
 \end{array}
 \left. \vphantom{\begin{array}{l} X \\ Y \\ W \\ \dots \end{array}} \right\} Z \text{ 量の労働 C}$$

第IV形態を転倒させて第VI形態を描きましたが、これはまだ商品の関係でした。さらに、それを社会化された労働の関係として、第VII形態をたててみましょう。

社会化された労働とは、共同体のメンバーになることで実現できます。そうすると、この形態は、マルクスが、 Kommunismusの低い段階の分配様式として述べた、「労働に応じた分配」を表示していることが分かります。等価形態の位置にある、各種の労働提供者たちは、社会の総生産物から社会の維持に必要な諸経費（6項目）を差し引いた後の残りを、各人が社会に提供した労働に応じて、受け取ることができるのです。つまり、この第VI形態は、市場社会主義が市場をのりこえる構想を描き出す際の素材としての意義、をもっているのではないのでしょうか。かつての計画経済に代わる、次のシステムへの移行の構想を、ここに読み取ることができます。ここでは、一般的等価物は、ある特定の一商品ではなくて、すべての種類の労働提供が、そのポジションを得るということですが、それは、社会的労働の成立の特質であり、社会の構成員が、それぞれ主体として財を分かち合える関係の始まりを意味します。

しかも、この第VII形態は、資本主義社会の胎内で産み出される第VI形態から、金融インフラの変革によって生成してくるだろうし、また、中国のように、国家が共産党の支配のもとにある社会では、この変革を容易にできるでしょう。

いずれにしても、第IV形態を転倒した第VI形態の形とさらにそれを進化させた第VII形態まで含めたこの社会的象形文字の図一枚で、貨幣の生成と、貨幣生成のない社会の富の仕組みが表現できます。伝統的な左翼の革命論である、権力奪取の発想からは、現実に存在している、市場社会主義から Kommunismusへの移行を構想できません。マルクスの時代には、市場社会主義は存在しておらず、またその構想もなかったのですが、しかし、『資本論』初版本文価値形態論には、その処方箋が描かれていたこととなります。いまこそ、この処方箋を具体化していく時ではないのでしょうか。

あとがき

12月26・7日と、揚州市で開催された中日社会主義フォーラムに参加してきました。中国に行く事がなければ、このような研究報告はできなかつたでしょう。おりしもマルクス生誕200年にあたり、また現地に行って分かったことですが、私が報告した12月27日は毛沢東の誕生日でした。

ホテルで、2日間缶詰でフォーラムを行った後、28日には市内散策があり、博物館に行った後、古運河と旧市街の散策をしました。驚いたのは、自販機がスマホ対応になっていて、スマホ決済のためのディスプレイがあり、そこに動画などが映されていたことでした。もう一つ、電動スクーターです。結構人通りのある旧市街の商店街を音もなく低速でスクーターが行きかっています。寒いので、皆さん防寒用の色とりどりの前カバーをつけて運転しています。揚州市は人口450万の大都市ですが、大気汚染はありませんでした。

中国のキャッシュレス化の体験をする機会はなかったですが、ユーゴの専門家、岩田昌征さんは、中国に来ればかならず大学食堂に食べに行くそうで、揚州大学の学食にも行って来られて、その感想を述べておられました。2階づくりのフードコートに、50軒の店舗があり、注文するとその場で作ってくれるのですが、現金は通用せず、同行してくれた学生のスマホで支払ったそうです。

なお、七つの価値形態を一覧できる付録をつけました。

商品とお金の弁証法的精神分析（上）

1. はじめに——問題の所在

お金の弁証法的精神分析、とは聞きなれない言葉です。資本主義の精神分析は、フランスの哲学者ドゥルーズと精神科医のガタリの共著『アンチ・オイディプス』（河出文庫）があり、思想界ではずいぶんもてはやされましたが、最近調べてみたのですが、そこにも商品とお金の弁証法的精神分析はありません。

私は前号掲載の研究論文で、『資本論』初版第IV形態の重要性と、しかしそれが全然理解されていないという現実を述べました。今回はなぜ理解されないのか、ということについて考えたのですが、その結論として、マルクスは初版第IV形態と交換過程論をまたがったお金の生成論を残しているのですが、それは実は商品とお金の弁証法的精神分析であって、そのような内容については、『資本論』を科学として研究しようとしている研究者たちには、手に負えなかったのではないかと、という判断をしたのです。

そうだとすると、まずはマルクスが『資本論』初版本文の価値形態論と交換過程論で明らかにした、商品所有者たちの無意識のうちでの本能的共同行為は、商品とお金の弁証法的精神分析という方法からもたらされたものだったのではないかと、という視角からもう一度考えてみたくなりました。またこのことが判明すれば、一般の人だけでなく、研究者たちもなぜ、無意識のうちに、この内容を避けてしまうのか、という、人びとの側の弁証法的精神分析も必要になってきます。

ここで精神分析という概念を持ち出したのは、無意識を対象としているからです。また、弁証法的という用語を頭につけたのは、一般の精神分析は、精神科医が患者を精神分析するという、主体と対象が分別されてしまっています。しかし、商品とお金の場合にはそうではないですね。主体と主体との精神的・概念的な関係を解明しなければならず、主体と主体との関係は、反照の弁証法で対応するしかないからです。反照の弁証法は、また説明する機会をつくることにして、とりあえずは、私が念頭に置いている弁証法的精神分析の意味をのべました。

だいたいこんな感じで、問題提起をさせてください。なお、これまで貨幣という用語を使ってきましたが、今回からはお金に統一します。人びとに話しかけるのに、商品と貨幣、ではなじみがなく、商品とお金の方が分かりやすいからです。

また、従来「物象化」という用途を使っていましたが、この言葉は一般には理解されないもので、「事物化」に変えます。それで、以前に物象化と書かれている箇所は、「事物（物象）化」というように修正しました。もともとマルクスは、『資本論』などで、Ding と Sache という言葉の使い分けをしており、前者は普通の意味での単なる物を意味しているのですが、後者の方は、商品のような、ただの物とはいえない、社会的な事物という意味でした。ところが『資本論』の日本語訳を見ますと、長谷部文雄以外の訳者たちは、双方を区別せず、両方とも「物」を訳しているのです。長谷部だけが、「物」と「物象」というように訳し分けており、物象化という言葉は、長谷部訳に従ったものでした。いずれにしても、『資本論』理解のためには、二つの言葉の区別は重要で、これがほとんどの訳書で区別されずに訳されたことが、商品とお金の弁証法的精神分析を不可能としてしまったのです。

今回は少し長くなりますので、上、下に分けて掲載します。そして、上では、エル・コープ設立初期に私が研究会報に書いた論文から関連箇所を引用し、現時点での点検と解説を行います。

2. エル・コープ設立準備会の回想から

1988年9月に、もう一つの生協の設立をめざして、京都協同組合運動研究会が発足し、私もそれに参加させてもらいましたが、そのころの会報は、ずいぶんいろいろな方面にわたる多くの人たちの研究論文が掲載され、エル・コープ設立の趣旨づくりに役立てられました。

エル・コープ設立25年に当たり、私は第二の創業の時期だと考えていますが、その内容を議論していくためにも、前号の論文のようないわば試論が必要かと考えています。

ところで、設立準備会時代のエル・コープには、ソ連崩壊がありました。私は、当時、政治運動を30年続けてきて、前回報告した『資本論』初版本文価値形態論の研究によって、ソ連崩壊以前に、政治権力を取っても、商品・貨幣をなくせないということに気づき、当時は革命の王道と考えられていた権力奪取のコースに疑問を持ち、それとは別の迂回作成が必要だと確信して、社会運動に参加しようと考えていて、研究会発足には、渡りに船で参加させてもらった、という経過があります。

そして、自らが新しく社会運動に加わることで、自分の考えをいろいろまとめたのです。

当時の問題意識は、お金が無意識のうちでの本能的共同行為で生成されていて、これを何とかするには、迂回作戦で、お金が生成しないような交易関係を作り出そう、ということで、社会運動の初心者として、これらの課題を社会運動が解決すべき問題として整理しようとしていました。そのときの基本的な研究課題が、無意識と文化でした。そして文化人類学の文化論やフロイトなどの精神分液の研究をしました。

エル・コープ設立初期時代の研究会では、私は次のようなテーマで報告し、会報に掲載しています。

『協同組合運動研究会報』第18号（1994年5月10日）掲載「物象化論への招待」

『協同組合運動研究会報』第20号（1994年7月10日）掲載「本能的共同行為・無意識・意識形態」

研究会は、同年5月22日（第53回）及び、7月24日（第55回）に実施されました。

3. 90年代初頭の研究成果の点検

① 私の初心

ちゃんとした心の準備の上で、社会運動に入門しましたので、政治運動の経験を活かしつつも、社会運動の参与観察をしながら、自分のプログラムを作成しようと、各種の文献調査もし、一応課題をまとめたのが「物象化論への招待」でした。そこには課題が次のように述べられています。

「そういうわけで、新しい社会運動は、従来の社会変革論に代わる自前の社会変革論をまだ持っていないのでしょうか。経済システムは巨大化したのに運動としての力が伸びていない、という現実には、新しい社会運動が自分自身の意味と力についていまだ自覚していないことのあらわれでしょう。

新しい社会運動にとって、いま問われていることは、それにふさわしい社会変革論を身につけることです。そのためには何から始めるべきでしょうか。」（協同組合運動研究会報、18号、「物象化論への招待」）

私的には、次世代の経済システムは、商品とお金に退場してもらいたいと考えていました。というのも、これらは、歴史的一時期に、その存立の条件が形成されたから現存しているわけで、その存立の条件がなくなれば、自ずから消滅する、と考えていたからです。そういうわけで、当時から、商品とお金の存立条件の解明に努力してきたのです。

この存立条件解明のために、90年代初頭には、文化と無意識の研究をしました。今回は文化については触れずに、「無意識のうちでの本能的共同行為」についての研究成果を踏まえて、先にあげた二つの文献での内容の紹介と点検から始めましょう。

② お金による意志支配

まずは、お金生成の意志支配の巧妙さについて次のように指摘しています。

「事物（物象）化論が明らかにしたことは、資本主義のシステムでは人格が事物（物象）化し、事物（物象）が人格化する、ということでした。私達が工場や農場で生産した電化製品や野菜が商品になっていくと、私たち生産者は、商品を生産する装置として人間的な性格を発揮できずに事物（物象）化され、他方商品を買う場合には、人間的な欲望にかかわりなく、持っているカネで欲望の範囲が決められてしまいます。

一寸考えればその不自然さに気付き、非人間的なシステムであることがわかるにもかかわらず、何故このシステムは続いてきたのでしょうか。それは、このシステムにあつては、人々は、商品や貨幣に自らの意志を支配されているからです。この事物（物象）による意志支配は、非常に巧妙に出来ていて、人々はなかなか支配されていることに気付かず、たとえ気付いたとしても、その支配から逃れる方策が立てられないのです。」（会報、18号）

意志支配については、あとで触れていますが、この個所で、事物に支配されていることに気づかない、という点について補足をおきましょう

人間は、他人に支配されれば嫌な感じをもたざるをえません。しかし、ここでの支配者は商品という事物であり、それ自体は人間の用途に役立つ財（使用価値）です。人々はそれを市場で買った後、生活のために消費します。ですから、それ自体自然物としてしか見えません。このような自然物に支配される、という点が、人間の合点のいかなないところでしょう。だから、このような事態を解明しようという気持ちにならないのです。

この現実には、意志支配の独特の仕組みによるものではないかということで、その仕組みについて解明しようとしています。

「市場にある商品は全て誰かの私有物です。従って、これを自分の物にするためには、等価物（お金）を用意し、交換しなければなりません。

事物（物象）としての商品がそれぞれ誰かの私有物でありながら、交換によって、社会の成員の誰にも利用できるものとなること、これを商品が社会性をもつことと考えましょう。そうすると、商品の社会性とは、あらゆる商品が無理なく交換される社会的形式をもつことだということが判明します。

あらゆる商品が単一の商品で価値を表すとき、この社会的形式（一般的価値形態）が出現しますが、その時、商品は共同行為をとらねばなりません。

商品自体には意志はありませんが、商品にはこの社会的形式を実現したい、という本性があります。この本性に商品所有者が従うとき、商品の共同行為が実現し、貨幣が生成されます。

このことは、水が高い所から低い所に流れることを利用し、水力発電所を建設するとき、人々が自然法則に従うことと共通性があります。しかし、この場合は自然法則の利用であるのに対し、商品の場合、人間の社会的関係を事物（物象）の相互関係として出現させてしまう点に違いがあります。

つまり、人間は事物（物象）に意志を支配され、その本性を実現する行為を行うことによって、事物（物象）化を成立させているのです。」（会報、20号、「本能的共同・無意識・意識形態」）

ここでは、商品をお金にする意志支配の仕組みが説明されています。市場に存在している商品は、それぞれ独立した生産者たちが勝手に生産したものであり、それは売れ残るかもしれません。このケースからわかるように、社会は売れ残りに責任をもちませんが、その理由は、個々の商品が、それぞれの生産者の私的所有物だからです。

ところが、私的所有物である生産物が、価格をつけて市場で売りに出されると、商品は、財（使用価値）として役立つものでありながら、市場での売値（交換価値、または価値）をもつことになります。財（使用価値）自体は、その生産者の私有物ですが、交換価値（価値）の方は、他の生産者の私有物と自分の私有物とを交換しようという意志の表明ですから、それは、ある種の社会的な関係とならざるをえません。

そうだとすると、個々の商品が、社会に通用する（交換できる）社会的形式が必要となりますが、それが、前回紹介した、価値形態のⅢ形態である、一般的価値形態です。この形式をとれば、ひとつの商品を除くすべての商品が、一般的等価物を仲介者として、それぞれ交換可能となります。というのも、この形式では、ひとつの商品以外の全商品がひとつの商品で自分たちの価値を表しているからであり、当然にも、すべての商品が、価値の比較をできて、交換比率が決まるからです。そのためには、ひとつの商品を一般的等価物にするためのその他の諸商品の共同行為が必要です。

ところが、商品自身が、この一般的価値形態であれば、どの商品も社会に通用する、それが自分の本性である、ということを示していても、商品自身は共同行為をとれません。

他方、商品所有者たちは、もともと自分の商品で、他の商品が買えればいいに越したことはないのでそうしようとします。そうすると、社会的象形文字としての商品の価値形態が、前回示した、初版のⅣ形態となり、この形式では、どの商品所有者たちも、他の商品を買うことができません。

そこで、商品が示している社会的象形文字のうち、商品所有者たちが、自分の商品で他の商品を買おうとするのではなく、ひとつの商品となら自分の商品を買っていい、という共同行為を全員が行えば、そこにお金生まれ、こうしてお金を仲介者として、売買が可能となります。

③ 無意識のうちでの本能的共同行為

このとき、商品所有者たちは、商品という事物に意志支配され、自らを事物化してしまうのです。このように、商品に意志支配されて、無意識のうちでの本能的共同行為をすることによって、人間が、商品という事物の担い手として立ち現れたのでした。この事物化の特色は次のようなものです。

「しかし、商品が商品所有者に共同行為をとらせ、貨幣を生成させるとき、そこにはどのような契約があるのでしょうか。考えてみれば、契約は人と人との関係で成立するものでした。商品の共同行為に人が参加するとき、人は他人との関係には関心をもちません。人は商品の本性に従った行動をすることによって、他人との関係をもちうる経済的主体になりうるのです。つまり、今日の市場経済では、人々は自らを事物（物象）化することなしには経済的主体として登場しえない、ということになります。事物（物象）化することによって、人々ははじめて、経済的契約の主体として登場します。

事物（物象）化すること、とはこの場合、商品の身になって考え、行動することでした。これが慣習となると個々人にとっての事物（物象）化とは、無意識のうちになされるものとなります。人々は、商品の本性が要求する共同行為に参加しますが、その行為は、契約などの意志行為とは意識されず、無意識のうちになされる本能的共同行為となります。」（同、20号）

ここでは、人間が商品に意志を宿すことの帰結について補足しておきましょう。植村邦彦によれば、イヌイットたちは、野生動物を神とあがめ、そして、その神からの要請として、人間の共同体内部では、食べ物の分かち合いが行われます。分かち合いをしないと、神の掟に背くことになるのです。植村は次のように述べています。

「ここで重要な論点は、『他の人びとと分かち合う』ことが、『人間と野生動物との互恵的な関係』という想像上の関係によって命じられた『適切な態度と意図』の表現だと理解されていることである。このような倫理的行動規範を逆から言えば、『他の人びととの分かち合い』が行われないと、人間と野生動物との関係は『互恵的』なものではなくなってしまい、野生動物の『再生』（つまり食物の再獲得）が保証されなくなる、ということである。」（植村邦彦「贈与と分かち合い——グレーバーの『負債論』をめぐって」『情況』2019年冬号所収、157頁）

これと比べて、現在のお金は、市民社会の神の位置にあります。お金を神とあがめていな

が現代人はなにをしているかといえば、分かち合いではなくて、自己利益だけを追求しています。これは一体なぜなのでしょう、と植村は問題提起しています。

私はこの植村の問いにたいして、イヌイットが野生動物を神としてあがめたのは、自分たちの食べ物を持続的に確保しようという意志によるものであるのに対して、お金の場合は人間の無意識のうちでの本能的共同行為によって生成し、そして、いったん生成したお金を神としてあがめる、という仕組みになっていることが関係しているように思います。

人間はもともと、共同体内では分かち合いを実現してきましたが、資本主義的市場社会になったとき、市場は資源配分能力をもっていますから、その自生的秩序にまかしておけば、社会全体の経済はうまく運営される、という市場信仰のもとに、個々人は勝手に振るまえばいいという、それまでの歴史にはなかった「自由」な個人が誕生することになったのですが、そのことが大いに関係していると思われます。このような観点を踏まえて、次の当時のお金を生成する無意識のうちでの本能的共同行為の分析を顧みてみましょう。

「いよいよ貨幣を生成する無意識のうちでの本能的共同行為についての考察に移りましょう。

ここで人々は商品に意志を宿し、事物（物象）に意志を支配されます。この社会的行為はくりかえされるうちに、無意識に行えるようになります。人間が誕生後、学習によってものにする社会的行為は例えば言語の使用のように無意識に行われるようになりますが、事物（物象）による意志支配も無意識のものとなります。

しかし、言語における無意識と商品・貨幣のもたらす事物（物象）化における無意識との違いがただちにあらわれてきます。言語自体人間にとっては新しい意識形態ですが、それを使用すること自体は何ら人々の意識を支配しません。ところが、事物（物象）による意志支配は人々の意識に一定の意識形態を与えます。

フロイト説を紹介したところで、意識を支配するものを個人の内面ではなく、事物（物象）の相互関係に求めなければならないと述べました。この作業にとりかかることがいま問われていることとなります。

私たちは通常世界を主体と客体に分割します。その上で、双方から相対的に独立した意識として、科学的知を捉えます。この枠組みそのものが一つの意識形態であり、この形態は実は事物（物象）化によってもたらされたものなのです。

主体—客体の二分割は近代的（ブルジョア的）知の枠組みであり、この二項対立図式を克服すること、このことは多くの哲学者や文芸批評家によって試みられています。しかし、筆者の知見が狭いからかも知れませんが、まだ、なるほどと思われる解は目にかかっていません。

というのも、哲学者は伝統的に意識のみを純粹にあつかいますし、文芸批評家は事物（物象）化の原理を解明するだけの努力をすることはまれですから、人の意識を事物（物象）の相互関係が支配することによって成立している一定の意識形態として解明するには役不足なのでしょう。

商品が自己の社会性をどのように表現するか、ということに注目してみましょう。或る商品テレビは他の商品上衣と関係することによって、上衣をテレビと同じ質のものとし、テレビの社会性を表現させます（5月例会レポート「図解価値形態論」参照）。このとき、上衣は上衣という自然物でありながら、テレビの社会性を表現しています。テレビの社会性とは、テレビでもなく、上衣でもないが、両者に共通な抽象的なもの（抽象的人間労働）です。ここでは上衣はその自然な形のままで、抽象的なものの化身となります。

この商品の価値形態の論理構造が、主体からも、客体からも切り離された、抽象的なものである科学的知をはじめとする意識形態の原形を提供しているのではないのでしょうか。

そして、意識が具体的なものから切り離され、抽象的なままで自立化されたとき、フロイトの言う無意識が浮上してきたとみなせるでしょう。資本主義以前の社会では、意識が科学として自立することはなく、精神は肉体から分離せず、肉体の活動が無意識として意識されることもなかったのでしょう。

そうだとすると、事物（物象）化にもとづく本能的共同行為の解体は、今日の意識形態の批判とその克服、つまりは新しい文化と知の創造から始まることになります。

市場経済のまっただなかに生み出されているもう一つの経済システムは、新しい文化と知を創造するネットワークとして機能する限りで、社会的に意義あるシステムとして持続し、本能的共同行為に代わりうる社会的共同行為を形成して、事物（物象）化を廃絶していく道を拓げていくことになるでしょう。」（会報、20号、「本能的共同・無意識・意識形態」）

先の引用のコメントで、資本主義的市場の普及によって、「自由」な個人が誕生したことと触れました。ここではその問題を少し掘り下げてみましょう。これから（下）で取り上げる、商品とお金の弁証法的精神分析の観点からの一つの仮説として受け止めてください。ただし、細部の実証は今後の課題です。

封建時代のような資本主義以前の社会は、人々は共同体のなかの群れを成す階層の一員としてそれぞれの規制の下にありました。近代人のような「自由」はなかったのです。そのころから市場はありましたが、現在のように社会全体を覆いつくすようなことはなく、おおむね自給自足で暮らしている人々で、季節的な定期市があり、そこで国際的な交易がおこなわれているくらいでした。しかし、資本主義が勃興し、労働力が商品として資本家に買われるようになってくると、市場の様相も変化してきます。というのも、労働者たちは、それまでの封建時代の農民とは違って、土地から切りはなされ、無産者となっていて、資本家に雇用されずには生きていけず、しかも、獲得した賃金で、生活資料を市場で買わなければならなくなるからです。

労働者は、封建的な身分的従属から解放され、労働市場で自分の労働力という商品を買う自由を獲得したのです。しかし、この「自由」は、身分制から政治的に解放された、という意味で政治的自由の獲得でしたが、他方で土地の利用権を失い、生産手段から「自由」にさせられることで、「二重の自由」のもとにあることになり、経済的には自由ではなく、資本家に経済的に従属することになりました。つまり、今日の諸個人の政治的自由の裏には、経済的従属が潜んでいるのです。ですから、私が「自由」な個人、というように、自由にカッコをつけたのは、このことにもとづいています。

この「自由」な個人は、どのような世界観を持つのでしょうか。まず、明らかなことは、個人は、自由に自分の労働力を売買できる主体です。他方で、財産の所有から自由であり、この個人にとっては、失われた生産手段が他人（資本家）の所有となっており、労働するためには資本家に雇用されるしかありません。

このような生活環境では、自分自身以外の他の、例えば生産手段などをすべて客体とみなさざるを得ません。主体とは自分の身一つであり、他はすべて、客体と見るほかはない状況に置かれているのです。

デカルトの有名な「われ思う、故にわれあり」という思索は、このような当時の労働者のおかれていた経済的状況を踏まえて、個人としての自我の確立を哲学的に確認した、ということの意味しないでしょうか。そして、デカルトの主体・客体図式は、まさに、労働者の社会的意識をまとめ上げたものであり、この意味で、事物化によってもたらされた社会的意識形態とみなすことができるでしょう。

次に、商品の簡単な価値形態の両極にある商品に注目してみましょう。前回述べたように、これは主体と主体の関係でした。この関係は、ある種思考の分析的抽象に似た抽象化を行い、ある商品価値がいくらであるか、という判断を示しています。この二つの商品による抽象化の特徴は、思考の場合には分析のたまものであるのに対して、商品の場合は、二つの商品がそれぞれ主体として関係しあうなかで、抽象化が行われているのです。この問題は非常に重要で、（下）で解明すべき中心課題であり、ここではこのことを指摘するにとどめておき、一旦ここで、エル・コープ設立初期の私自身の論文の点検作業を終わります。

資料：マルクスによる商品とお金の弁証法的精神分析の事例

無意識的、本能的作用

「彼らが彼らのいろいろな労働を相互に人間労働として関係させるのは、彼らが彼らの諸生産物を相互に価値として関係させるからである。人的な関係が事物的な形態によって隠されているのである。したがって、この価値の額には、それがなんであるか、は書かれていないのである。人間は、彼らの諸生産物を相互に諸商品として関係させるためには、彼らのいろいろに違った労働を抽象的な人間労働に等置することを強制されているのである。彼らはそれを知ってはいない。しかし、彼らは、物質的なものを抽象物たる価値に還元することによって、それを行うのである。これこそは彼らの頭脳の自然発生的な、したがってまた無意識的、本能的な作用なのであって、この作用は、彼らの物質的生産の特殊な様式と、この生産が彼らをそのなかに置くところの諸関係とから必然的に出てくるのである。」(『資本論』初版、原典 62 頁)

「われわれの商品所持者たちは、当惑のあまり、ファウストのように考え込む。はじめに業ありき。だから、彼らは、考えるよりまえに、すでに行っていたのである。商品の本性の諸法則は、商品所持者たちの自然本能において自分を実証しているのである。彼らが自分たちの商品を互いに価値として関係させ、したがってまた諸商品として関係させることができるのは、ただ、彼らが自分たちの商品を、一般的な等価物としてのなんらかの別の商品に対立的に関係させる、ということによってのみである。このことは、商品の分析によって明らかになった。しかし、ただ社会的な行為だけが、ある特定の商品を一般的等価物にすることができるのである。それだから、すべての他の商品の社会的な行為が、ある特定の商品を除いて、この商品においてすべての他の商品が自分たちの価値を全面的に表すのである。このことによって、この商品の現物形態は、社会的に認められた等価形態になる。一般的な等価物であるということは、社会的な過程によって、この除外された商品の独自の社会的機能となる。こうして、この商品は——貨幣になるのである。『彼らは心をつにしている。そして、自分たちの力と権力を獣に与える。この刻印のない者は、みな、ものを買うことも売ることもできないようにした。この刻印は、その獣の名、またはその名の数字のことである。』(ヨハネ黙示録)」(『資本論』初版、原典、73 頁)

* 『資本論』初版より、訳文は、国民文庫版、岡崎次郎訳ですが、物を事物に代えています。

『協同組合運動研究会報』(281 号) 掲載論文

商品とお金の弁証法的精神分析 (下)

『アンチ・オイディプス』の精神分析批判

はじめに

今回の研究論文は、見通しのないまま書き始めました。何しろ、類似の研究が見当たらないので、手探りになることは覚悟の上でした。とりあえずは予備知識として、資本主義を「分裂分析」したドゥルーズ・ガタリの『アンチ・オイディプス』(下、河出文庫、2006 年、初訳、1986 年、河出書房新社) が先行研究としてあるのでこれを参照しましたが、商品とお金の弁証法的精神分析にまでは至っていないことが分かり、自身の問題意識をまとめることで、いったんは締めくくろうと考えていたのです。

ところが、今回改めて、商品とお金の弁証法的精神分析を志して『アンチ・オイディプス』を読み直し、そして、フランソワ・ドスの『ドゥルーズ・ガタリ 交差的評伝』(河出書房新社、2009 年、以下『評伝』と略記) を参照したところ、資本主義を「分裂分析」した『ア

ンチ・オイディプス』と、それ以降に出版された『分子革命』（法政大学出版局、1988年）や『機械的無意識』（法政大学出版局、1990年）などから学ぶことは不可避と判断するに至りました。『アンチ・オイディプス』はずっと気になっていて、拾い読み程度はしたのですが、制作意図と概要が分からず、理解できないままでした。しかし、今回再読した上で『評伝』を参照してみて驚いたのです。

この書の概略が紹介されているだろうと期待して、『評伝』の該当箇所を読んできましたが、そこには概要ではなくて、この書が出版された当時の各界からの反響の紹介でした。そしてそれが何よりも、この書の制作意図の解明に役立ち、私にとっては、概論以上の獲得物をもたらしたのです。

『評伝』によれば、この書は精神分析に対する根本的な批判を提起していて、そのため、沈黙したラカンを除く精神医学関係の有名人たちが、こぞって反発的な批判を展開したのです。ドゥルーズとガタリ（以下二人と略記）は、資本主義に対する自らの批判を「分裂分析」と称していて、実はこれは「精神分析」とは異なる分析方法なのですね。ここのところを私は同一視していて、てっきり二人は、資本主義に対して精神分析をしようと意図したと考えていたのです。ところが『評伝』を読んでわかったことは、精神分析の批判の上に二人は「分裂分析」という別の方法を確立したのであって、この二つの方法は、分析対象を全く異にし、したがって、叙述の方法も異なるものとして、用いられていたのです。

このことが分かると、この書の第3章、第9節 文明資本主義機械 と、第10節 資本主義の表象 の二つの節は、二人が資本主義を「分裂分析」したところだと判明します。そして、第4章、第2節 分子的無意識 と、第3節 精神分析と資本主義 の二つの節は、二人が精神分析の批判を展開したところだったのです。

このことが判明したので、今度は、二人の次の共著『千のプラトー』を書き上げる前に、ガタリが書いた諸論文をまとめた『分子革命』や『機械的無意識』を読んでみました。そしてまた驚いたのです。『アンチ・オイディプス』では、資本主義の「分裂分析」が提起されてはいるのですが、そこで展開されている二人の資本主義批判は、何分、用いられている用語が、資本主義の生産様式の名称に関しては、生産機械、欲望機械、資本主義の運動に関しては、脱領土化、脱コード化、主体に関しては、器官なき身体など、なじみのない用語が使われ、文芸的類推がなされていて、これを用いて彼らの資本主義批判を紹介しても、一般には理解不能でしょう。ネットで検索してみても、二人が「分裂分析」に使用している用語は、一般の理解の彼方にあるようで、ウィキペディアを参照しても、大したことは書かれていません。

いったんはそう考えていたのですが、ガタリの単著では、「分裂分析」や、機械や、横断性や、分子革命や、無意識などの二人の独特の用語が、実に分かりやすく説明されているのです。そして判明したことは、商品とお金の弁証法的精神分析を成し遂げるためには、ガタリの資本主義に対する「分裂分析」が土台として絶対不可欠だということでした。そのうえさらに、現代の資本主義についても「総合的世界資本」という概念を提起していて、これは私が構想している「負債経済論」や、IT技術の下で変容しつつある資本主義的生産様式の変容を予測しているのです。

そういうわけで、今回だけでは論文はとてども完結しないことに気づきました。それで、今回は、『アンチ・オイディプス』の精神分析批判、というテーマで、二人が展開している精神分析に対する根底的な批判の紹介にとどめて一旦は論文を締めくくり、続きは数か月後に掲載することにします。

精神分析の問題点

ドゥルーズとガタリは、第3節 精神分析と資本主義、で精神分析とは全く異なる自らの「分裂分析」について、次のように特徴づけています。

「分裂分析の主張は単純である。欲望は機械であり、諸機械の総合であり、機械上アレン

ジメントであり、つまり欲望機械なのである。欲望は生産の秩序に属し、あらゆる生産は欲望的生産であり、社会的生産である。だから、私たちは、精神分析がこの生産の秩序を粉碎したこと、この秩序を表象の中に逆もどりさせたことを非難しているのだ。」(『アンチ・オイディプス』下、152~3頁)

精神分析の分析対象は、個人の心理であり、したがって欲望も、個人の内面の心理的衝動とされています。これに対して、二人の「分裂分析」が問題とする欲望は、個人の内面の外部にある機械、つまり資本主義の生産様式そのものとされています。欲望とは、個人の内面の心理的働きによって掻き立てられるものではなくて、個人の外にある資本主義のシステムそのものがその根本的原因だということです。資本主義の生産の仕組みは、個人に欲望をもたらす機能を持っていて、したがってそれは単なる機械ではなくて、「欲望機械」だということです。このような立場から、二人は精神分析が取り上げる無意識に対して次のように批判しています。

「信ずるということは、無意識の表象が遠くから意識の内実には及ぼす効果なのであろうか。しかし、逆に、何が無意識をこうした表象の常態に還元したのか。それはまず生産に代えられた信仰の体系ではないのか。じつは、社会的生産が、自律的とみなされる諸信念において疎外されると、欲望的生産が、無意識的といわれる諸表象においてねじまげられるのとは、同時なのである。」(153頁)

「欲望機械と社会野という生産の組み合わせは、神話・家族という全く性質の異なる表象の組み合わせに席をゆずる。」(155頁)

フロイトは個人の意識の奥に無意識を想定しましたが、この個人の内面にあるとされる無意識の表象とは、個人の外にある欲望的生産、それも疎外された形のもので、それが個人の内面に無意識という表象を作りだしている、というように二人は精神分析によって立つ土台を覆してしまいます。その結果、精神分析では、社会的生産というトータルな無意識生産装置が無視され、それが個々人の意識の中に作りだす、神話と家族という表象の組み合わせに置き換えられてしまうということです。では二人の「分裂分析」の場合はどうなのでしょう。それは次のように簡潔にまとめられています。

「フロイトは欲望そのものを抽出した最初のひとであり、こうして彼らは現実に表象の中におさまらない生産の領域を抽出した。主観的抽象労働とまったく同じように、主観的抽象的欲望は脱領土化の運動と切り離せない。脱領土化の運動は、特殊な規定のもとに隠れていたもろもろの機械や代行者の働きを顕にする。こうした特殊な規定は、まだ欲望や労働を、表象の枠組みの中で、特定の人物や対象にしばりつけていたのである。機械と欲望的生産、心理的装置と欲望の諸機械、欲望機械と、この諸機械を解釈する能力を持つ分析機械の組み立て、これらはすなわち自由な総合の領域であって、部分的機械、包含的機械、遊牧的接続、多義的な流れと連鎖、形質導入的切断といったすべてが可能である。——無意識の組織体としての欲望機械と、これがもろもろの組織された群れの中に統計的に構成するモル的組織体との関係、ここから出現する抑制 - 抑圧装置…。ここに分析の領野が構成される。表象の下に隠れているこの領野は、オイディプスさえ貫き、神話や悲劇さえ貫いて、生きのび作用し続けるだろう。神話と悲劇は、しかし精神分析と表象の和解を指示するのである。」(159~160頁)

簡潔な要約なので、説明しておきましょう。「主観的抽象労働」という観念は、商品交換が、異なる使用価値をそれぞれ同一の交換価値(価格)に抽象している現実から生み出されるものです。そして欲望も、資本主義の下では具体的な欲望ではなくて、欲求不満な「主観的抽象的欲望」とならざるを得ません。それは資本主義の運動が「脱領土化」つまり、固定的な存在をたえず流動させてしまう働きをもつことによって、欲望の内容が次々と変動していき、こうして具体的な欲望自体が抽象化され、欲望を欲望しているような感覚をもたらしてしまいます。このような資本主義的生産の分裂症的症状(この意味は、分裂症患者に見られるとされている、とらえどころがないように意識が変動するさまからの類推でしょう。)を解明することが「分裂分析」の課題なのです。(このところは、詳しくは後日報告する

ガタリの単著研究に譲ります)

無意識も、このような資本主義の欲望機械としての存在が個人の内面に植え付けるものとして把握し、その植え付けの仕組みを解明することが肝心で、これを怠った精神分析は、資本主義の欲望機械が作りだしている無意識を、その発生原因と切り離して、表象の中にある神話的・家族的要素にしか注目しないことによって、発生原因そのものの批判に向かわず、それとの和解をしてしまっている、というように二人は考えているのです。こうして精神分析は次のような限界に取りつかれることになります。

「精神分析は、象徴的表象を一定の対象性や社会的客観的諸条件に関係づける代わりに、それをリビドーとしての欲望の主観的普遍的本質に関係づける。だから、精神分析における脱コード化の操作は、この操作が人文諸科学において意味していること、すなわちあれこれのコードの秘密を発見するということ〔コード解読〕をもはや意味することはできない。」
161頁)

確かに精神分析の専門家にも、社会に対して批判的視点を持った人たちはいます。しかし、その人たちの批判は現実社会の矛盾の解明には至らない、その根本的な理由について、二人は、精神分析による脱コード化、つまり、表象として現れているものへの批判が、単に意識の内部での表象間の変換にとどまり、現実の諸関係の分析とそれへの批判には向かえない、ということに求めているのです。

そして、この精神分析の置かれている状況は、また資本主義自体が生みだしているのではないかと二人は述べています。

「このことは明らかに、資本主義的人間が、あるいは資本主義の中の間人間が労働することを欲しているということでもなければ、また自分の欲望にしたがって労働しているということでもない。欲望と労働の一体性は神話ではなくて、むしろ、優れて活動的なユートピアであり、欲望的生産において踏み超えられてゆく資本主義の極限を示しているのだ。しかし、なぜ欲望的生産が、まさに資本主義の境界にあって、たえず抵抗を受けるのか、なぜ、資本主義は、欲望と労働の主観的本質——生産活動一般としての共通な本質——を発見すると同時に、新たに、たちまち、この本質を抑制的機械の中に疎外することをやめないのか。これによって本質は二つに分かれたれ、一方に抽象的労働、他方に抽象的欲望として分離されたままである。つまり経済学および精神分析、政治経済学およびリビドー経済学があるのだ。」
(163~4頁)

二人によれば、資本主義の欲望生産は、一方では資本主義の限界を超えるほどの流れを作りだしていますが、他方で、資本主義は、その境界で抵抗しています。その抵抗の手段は、労働と欲望とを疎外することです。資本主義は、労働と欲望との本質的發展を疎外しますが、具体的には、労働を疎外してその果実を奪って、労働を抽象化してしまい、また欲望も疎外してその内容を変転させ、欲望を抽象化してしまいます。こうして資本主義の限界の内部では、本来欲望の達成手段であるはずの労働がそうはならず、労働と欲望とが結び付かず、抽象的労働と抽象的欲望とが分離されてしまうというのです。そして、この分離に対応して、現状を肯定的にとらえる経済学と精神分析とが影響力を持つようになっているというのです。

これらの精神分析が現代の社会で果たしている役割についての言及は、二人の資本主義の分裂的批判に裏付けられているのですが、『アンチ・オイディプス』ではわかりづらいその内容について、引き続いて詳述したいと考えています。

商品という社会的象形文字を読む（最終版）

2019年1月20日

はじめに

今から、『資本論』初本文価値形態論を素材にして、商品という社会的象形文字を読む作業に入ります。別に『資本論』を読んでいなくても構いません。商品や貨幣（お金）は、私たちが毎日毎時つきあっているものであり、日常でありふれたものです。ただ、商品を経済的象形文字として読むには、いくつかの約束事があります。商品を経済的象形文字として解釈するとは、言い換えれば、社会の中の市場に存在している商品と貨幣の関係を、文字として読むということです。その際に、貨幣も商品であり、したがって、まずは、貨幣が登場しない商品の関係を考えます。これは、例えば、1万円のシャツ5枚は、5万円の上着と同じ価格ですから、5枚のシャツ＝一着の上着、と表現できますね。これが商品の価値形態の基本形です。

価値形態論を始めて解明した、マルクスの、『資本論』初本文の価値形態には、四つの種類があります。私は、この四つの価値形態に、新しく三つの形態を付け加えました。初本文価値形態論では、貨幣形態は登場しないですから、交換過程での、人格が介在することによって成される貨幣の生成によって成立する、貨幣形態を第Ⅴ形態としました。そして、さらに、私のアイデアである、第Ⅳ形態を転倒したものを、第Ⅵ形態とします。最後に、第Ⅵ形態が、その進化過程で商品交換をのりこえた形を、第Ⅶ形態としました。再度確認しますが、マルクスが述べているのは第Ⅳ形態までで、あとの三つの形態は私が付け加えたものです。では、この七つの価値形態に即して説明していきましょう。その際、『資本論』で書かれている内容とはあまり重複しないかたちで、単に文字を読むという観点から考察します。

A) 第Ⅰ形態（簡単な価値形態）

X 量の商品 A = Y 量の商品 B

先に述べたように、価値形態とは商品と商品との関係をあらわしたものです。等式を使っていますが、数学とは違って、等式の両辺にはそれぞれ意味があります。この場合、商品 A が自分の価値を商品 B で表現しているということで、左辺は相対的価値形態、右辺は等価形態と名付けられています。左辺の商品 A は、自分の価値を右辺の商品 B で表現している、ということなのです。平たく言えば、商品 A の価値は商品 B に値する、ということです。

ここでの問題は、商品 A が、自分に商品 B を等置しているのか、それとも、自分を商品 B に等置しているのか、ということです。後者だと、商品 A は商品 B を同等化しているということになりやすいし、それはこの等式を、主語＝述語という論理式として読んでいくことになります。しかし、ここではそうではなくて、商品 A は、自分に商品 B を等置しているのです。いわば相手に判断をゆだねているのです。つまり自分だけでなく、相手も主体として扱っているのです。

このところは、今村仁司が『暴力のオントロジー』（勁草書房、1982年）で、商品 A が、自分を商品 B に等置していると読んで、これを暴力の始まりとみなしました。それは、初版の誤訳に基づくもので、商品 A は、自分を商品 B に等置しているのではなくて、逆に自分に商品 B を等置しているのだということは、私には、80年代からわかっていました。ところが、相手を主体として扱っているという理解には至らず、批判できないでいました。しかし、第Ⅰ形態が、自分の価値を相手に判断してもらうという関係、つまり相手を敬待する作法がそこにはあることが分かれば、ここは暴力の始まりではなくて分かち合いの関係なのです。ね。（このことに気づいたのも昨年末でした。今村説はおかしいと思っていましたが、30年

ぶりに批判できました。)

私は、この二つの読みの違いを言葉で表現しようと努力してきました。しかし、これは、無理な試みだったことが分かりました。商品Aが、自分を商品Bに等置する、という読みは、二つの商品のことなる使用価値が、同じものだという判断が含まれています。この判断は端的に誤りなんですね。他方、商品Aが、自分に商品Bを等置している、という読みの場合は、異なる二つの使用価値とは別の共通なものをこの等式は表現しているのです。

マルクスは第Ⅰ形態の分析では、この共通なもの、人間労働が、二つの商品の関係でどのように抽象化されていくかという事態抽象の仕組みを明らかにしているのですが、それは、実は、主体と主体との反照関係の分析でした。ここでは、読み方の違いを指摘して置くにとどめますが、

B) 第Ⅱ形態 (全体的な価値形態)

$$\begin{aligned} X \text{ 量の商品 A} &= Y \text{ 量の商品 B} \\ &= Z \text{ 量の商品 C} \\ &= W \text{ 量の商品 D} \\ &= \dots \end{aligned}$$

ここでは、商品Aは、さまざまな商品を主体として扱っています。そうすることで商品Aの価値が、さまざまな具体的労働で表現されていることになり、それらの労働の違いが、この事物相互の関係で抽象されて、商品Aが、この関係では、共通な抽象的人間労働として表示されていることが読み取れます。

つまり、第Ⅰ形態の分析では、思考によって事態抽象の仕組みが解明されましたが、ここでは、商品を社会的象形文字として読むことで、事態抽象という仕組みが働いていることが分かるのです。

C) 第Ⅲ形態 (一般的な価値形態)

$$\left. \begin{aligned} Y \text{ 量の商品 B} &= \\ Z \text{ 量の商品 C} &= \\ W \text{ 量の商品 D} &= \\ \dots &= \end{aligned} \right\} X \text{ 量の商品 A}$$

第Ⅱ形態を逆から見れば、この第Ⅲ形態となります。ここでは、商品Aは、他のすべての商品の等価物であり、したがって、諸商品の一般的な等価物として表示されています。一般的等価物としての商品Aの表示は、商品A以外のすべての商品が、共同して商品Aを主体として扱っていることの結果です。また、ここで相対的価値形態にある諸商品は、商品Aを仲立ちにして、それぞれがつながり合えます。ここで諸商品は始めて、社会に通用する形態を獲得したのでした。『資本論』現行版の価値形態論では、次の第Ⅳ形態は、一般的等価物が、さまざまな商品から金に固定された、貨幣形態となっています。貨幣は、人格の関与のない価値形態論の領域で生成するという誤解が生じます。ところが、初版本文には、他には見られない、次の第Ⅳ形態が続きます。

D) 第Ⅳ形態 (初版本文第Ⅳ形態)

$$\begin{aligned} X \text{ 量の商品 A} &= Y \text{ 量の商品 B} \\ &= Z \text{ 量の商品 C} \end{aligned}$$

=W 量の商品 D
=

Y 量の商品 B =X 量の商品 A
 =Z 量の商品 C
 =W 量の商品 D
 =

Z 量の商品 C =X 量の商品 A
 =Y 量の商品 B
 =W 量の商品 D
 =

この第IV形態は、『資本論』初本文価値形態論にだけ登場しています。この社会的象形文字は、所有者が登場しない、商品の価値形態論の領域だけでは、貨幣は生成されず、商品の交換過程での人格（商品所有者）の登場を待つことで、貨幣が生成されるということを表示しています。つまり、すべての商品が、相手を主体として扱おうと、商品世界の統一的秩序は生まれえない、という意味を表現しているのです。

E) 第V形態（交換過程での貨幣生成）

X 量の商品 A = }
Y 量の商品 B = } V 量の金
Z 量の商品 C = }
. =

第二章 交換過程、でマルクスは商品所有者を登場させます。この人格は、「自分の意志がそれらの物においてある定在をもつところの諸人格」（初版交換過程）です。交換過程に登場する商品所有者は、第IV形態を受けて、考える前に行動して、無意識のうちでの本能的共同行為に参加し、そのことで貨幣を生成します。人格が介在しなければ貨幣は生まれることはないのです。この点が、現行版『資本論』では隠されています。

この、初版の貨幣生成論によれば、たとえば、トヨタが車に 100 万円の価格をつければ、その裏にトヨタがまったく自覚せずに、金を貨幣とする無意識のうちでの本能的共同行為に、参加していることが分かります。つまり、貨幣は、生産物が商品として交換過程で価格をつけて送り出されるつど、生成されているのです。ここから、貨幣を生成しないような人間の関与の仕方、を構想できるのではないのでしょうか。私が付け加えた次の二つの形態はその素材です。

F) 第VI形態（だれもが貨幣形態になりうる＝地域通貨）

一枚の上着 = }
一〇ポンドの茶 = } 二〇エレルのリンネル
四ポンドのコーヒー = }
. =

二〇エレルのリンネル = }
一〇ポンドの茶 = } 一着の上着
四ポンドのコーヒー = }
. =

二〇エレルのリンネル = }
一枚の上着 = } 一〇ポンドの茶

四ポンドのコーヒー =
 =

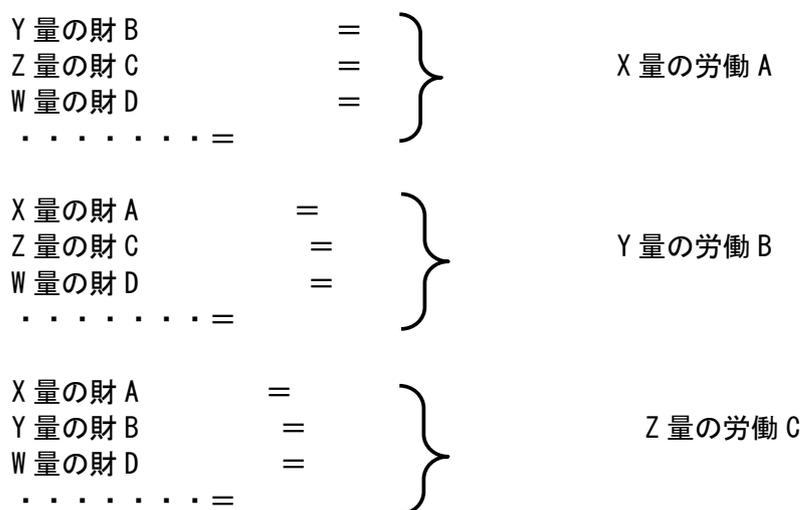
現実には、第IV形態の矛盾は、交換過程での、商品所有者たちの無意識のうちでの本能的共同行為によって、貨幣生成の運動として、解決されています。しかし、第IV形態は、貨幣を生成しないもう一つの経済を暗示している、と読みとれないでしょうか。この観点から、第IV形態を転倒させて第VI形態を描いてみましょう。この形態で等価形態にある商品の所有者たちは、どのような社会的関係をもつのでしょうか。

その一つが地域通貨です。地域通貨の場合は、自分の生産物で、他の人の商品が買えますが、それは地域通貨のメンバーが、共同体を構成しているからです。ある意味で、地域通貨は共同体内部の人々が、それぞれ貨幣を創造することで成立している、と見る事ができることが分かります。

また、ここでは、主体相互が分かち合える関係の萌芽が、作り出されていると想定できないでしょうか。主体相互の分かち合いが可能な社会システムが、この第VI形態で示唆されていて、それへの移行が展望できるのではないのでしょうか。というのも、この形態は資本主義の下でも実現可能です。そしてこの形態の占める領域が拡大していけば、現在の主流である貨幣形態の占める役割が狭まっていくでしょう。

また、金融インフラがIT技術の発展で、変貌してキャッシュレスが実現しつつあり、スマホが金融機関の端末として、利用されるようになってきています。また、アマゾンなどの大企業が発行するクーポンなど、銀行券に代わるツールが多様になってきています。まだまだ研究不足ですが、金融インフラの発展から新しい動きが始まりそうです。

G) 第VII形態 (貨幣形態をつくらない=労働に応じた分配)



第IV形態を転倒させて第VI形態を描きましたが、これはまだ商品の関係でした。さらに、それを社会化された労働の関係として、第VII形態をたててみましょう。

社会化された労働とは、共同体のメンバーになることで実現できます。そうすると、この形態は、マルクスが、 Kommunizmus の低い段階の分配様式として述べた、「労働に応じた分配」を表示していることが分かります。等価形態の位置にある、各種の労働提供者たちは、社会の総生産物から社会の維持に必要な諸経費(6項目)を差し引いた後の残りを、各人が社会に提供した労働に応じて、受け取ることができるのです。つまり、この第VI形態は、市場社会主義が、市場をのりこえる構想を描き出す際の素材としての意義、をもっているのではないのでしょうか。かつての計画経済に代わる、次のシステムへの移行の構想を、ここに読

み取ることができます。ここでは、一般的等価物は、ある特定の一商品ではなくて、すべての種類の労働提供が、そのポジションを得るということですが、それは、社会的労働の成立の特質であり、社会の構成員が、それぞれ主体として財を分かち合える関係の始まりを意味します。

しかも、この第Ⅶ形態は、資本主義社会の胎内で産み出される第Ⅵ形態から、金融インフラの変革によって生成してくるだろうし、また、中国のように、国家が共産党の支配のもとにある社会では、この変革を容易にできるでしょう。

いずれにしても、第Ⅳ形態を転倒した第Ⅵ形態の形と、さらにそれを進化させた第Ⅶ形態まで含めたこの社会的象形文字の図一枚で、貨幣の生成と、貨幣生成のない社会の富の仕組みが表現できます。伝統的な左翼の革命論である、権力奪取の発想からは、現実に存在している、市場社会主義からコミュニズムへの移行を構想できません。マルクスの時代には、市場社会主義は存在しておらず、またその構想もなかったのですが、しかし、『資本論』初版本文価値形態論には、その処方箋が描かれていたこととなります。いまこそ、この処方箋を具体化していく時ではないでしょうか。